第２号

INUYAMA-GAKU

広報誌

犬山学

シンポジウム会場：博物館明治村 聖ザビエル天主堂

特集：学校法人市邨学園 創立111周年記念
名古屋経済大学 犬山学研究センター設立記念シンポジウム

レセプション会場：博物館明治村 帝国ホテル

INUYAMA-GAKU | 2018.2 | SECOND ISSUE

名古屋経済大学 犬山学研究センター

犬山学研究センター設立記念シンポジウム

2017年10月21日(土) 博物館明治村の聖ザビエル天主堂において、犬山学研究センター設立記念シンポジウムが開催されました。それぞれの分野で犬山を研究するプレゼンターをお迎えし、犬山学研究の魅力についてお話いただきました。

開会挨拶

学校法人市邨学園理事長
末岡 仁

本日は犬山学研究センター設立の記念シンポジウムに、お越しをいただきましたこと、御礼を申し上げます。

冒頭一言、ご挨拶を申し上げます。

先週、本学・名古屋経済大学は大学祭を開催致しました。ここ数年、犬山商工会議所の犬山市産業振興祭の中の一会場としていただいて、本学の学生教職員のみならず、多くの近隣市民の皆様にお越しをいただきました。少々あいにくの天候でしたが大いに盛り上がることが出来ました。

2週続けての雨、しかも台風も心配されるお足元の悪い中、また、明日は大切な国政選挙の日ということもあり、今日は皆様にお越しをいただきましたことは、はなはだ恐縮ではありますが、何ヶ月も前から予定していたことゆえ、ご容赦をいただければと思います。

また今回、博物館明治村・所長の吉田善一郎様を始め関係の皆様にご理解いただき、シンポジウムの会場として、犬山市の宝の1つである、ここ明治村を会場とすることができました。合わせて御礼申し上げます。

今回のテーマであります、犬山学でありますが、センターの詳細な経緯、目的、これからのこと等はこの後、センター長の中村よりご説明を申し上げますし、本日のシンポジウムの内容の中でも出てまいりますが、本年度の4月1日に設立いたしました。これは何も、今年になって一足飛びでこしらえたわけではありません。

本学の前・佐々木学長のころから、カリキュラム改革の中で、「今のうちの学生にとって必要な学びとは何か」ということを考えてきました。多くの学生にとって、大学は社会に出る前の最後のトレーニング機関であり、卒業し4月からは実社会において日々の業務のなかで正解のない難題にぶつかることになります。よって、入学して早いうちから、キャンパスを飛び出て、本学周辺、犬山・小牧を中心とするこの地域を学びの舞台として、リアルな正解のない題材に挑む「体験型学習」を充実させてきました。そうこうしているうちに、あらためて犬山の持つ、歴史・自然・産業等の魅力を認識しつつも、まだまだ知られていない資源も含めて、これは研究しなければならない、ということで今回のこの運びとなりました。

犬山には、東京大学、京都大学、名古屋大学の研究所があり、ここ明治村、リトルワールド、モンキーセンターの博物館、そして、本日は成瀬淳子理事長にもお越しいただいていますが犬山城白帝文庫に代表される、市民の草の根的な研究機関もあります。この犬山学研究センターが、それぞれをつなぐハブの役割を果たし、それぞれの研究機関の相乗効果によって、意義深い研究に繋がることを確信しています。

本年、本学園は創立111周年にあたります。創立者の市邨芳樹先生の教えである、「一に人物、二に伎倆」に基づいて、女子向けの商業教育のパイオニアとして、これまで17万人余の卒業生を送り出してきました。また、 100年以上前の当時から、「世界は我が市場ならずや」とグローバルに活躍することの重要性も説いています。現在、本学には、ベトナム、中国を中心とするアジア圏から、 400名を超える留学生がいます。本学はこれからも、この犬山を舞台に、「地域・国際」これをキーワードにしながら、社会に役に立つ人材を育成し、地域に貢献して参ります。

結びといたしますが、本日のシンポジウムが、皆様にとって有意義となりますことを祈念し、また、今後とも本学の教育活動に皆様のご理解ご協力を賜りますことをお願い申し上げ、冒頭の挨拶といたします。最後までよろしくお願い申し上げます。

祝辞・来賓紹介

祝 辞

文部科学副大臣
丹羽 秀樹

この度、貴学関係者の皆様方の御尽力により、犬山学研究センターが設立され、設立記念シンポジウムが盛大に開催されましたことを心よりお慶び申し上げます。

現在、内閣においては、人生100年時代やSociety5.0の到来を見据えた経済社会を構想する中で、内閣一丸となって、「人づくり革命」を断行して「生産性革命」を実現すること、将来にわたって地域経済の成長力を確保する「地方創生」を成し遂げることを最大の使命としております。その重要な鍵を握るのは、言うまでもなく、各地域の「知の拠点」である大学です。

貴学におかれては、これまでも、地元企業や自治体等とも連携し、地域社会経済の担い手となる人材の育成に取り組まれるとともに、教育環境のグローバル化を積極的に進められているものと承知しております。

豊かな地域資源の発掘・研究やその成果を生かした人材育成、これらの活動を支える産学官連携ネットワークの形成など、犬山学研究センターにおける意欲的な取り組みを通じて、貴学が「地方創生と人づくり」の拠点として益々発展されることを心より祈念いたしております。

犬山学研究センター＆犬山学ネットワークの紹介

犬山学研究センター長
中村 真咲

名古屋経済大学は、市邨学園創立111周年記念事業の一環として、犬山学研究センターを設立致しました。センター設立にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

犬山は、木曽川・飛騨川・中山道が交差するために古来より尾張・美濃・飛騨・信濃を結ぶ商業・文化・情報の結節点として栄え、川の文化と山の文化が交わる「犬山文化圏」とも言うべき独自の文化圏を形成してきました。

「犬山学」とは、その「犬山文化圏」の歴史的役割とその現代的意義を明らかにするための学際的研究手法であると現時点では定義しておきます。

本センターは、そのような犬山の豊富な地域資源（歴史、自然、産業）を研究し、体系的な犬山学として構築するとともに、地域の研究機関・NPO・市民団体・地方自治体・企業と協力して産官学連携ネットワークを構築します。

また、地域資源をデジタル機材によってアーカイブ化・教材化し、あるいは体験型教育プログラムとして開発・公開していくことにより、学生・市民・中高生が犬山の忘れられた魅力を再発見し、深い地域理解を持って地域の問題解決に取り組むことができる人材、そして日本の歴史・文化・社会をアジアとの比較において理解し、地域の国際化に貢献できる人材を育成する「地域再生と人づくり」の拠点となることをめざします。

このような本センターの活動にご理解、ご支援をよろしくお願い致します。

プレゼン① 犬山研究の魅力：歴史

松田憲治・尾張藩社会研究会会員、名古屋芸術大学名誉教授

松田 憲治

法学修士、愛知学院大学大学院法学研究科博士課程満期退学。名古屋自由学院短期大学講師、名古屋芸術大学教授を経て、現在に至る。愛知県史編纂委員会近世部会調査執筆委員、地方史研究協議会愛知県委員を歴任。

犬山は戦国以来、尾張防衛の要として重要視されてきました。尾張藩も成瀬家家臣とは別に藩士による犬山城番組を置いています。犬山は早くから町並が整備され、名古屋城下、熱田、岐阜と並んでの町としての扱いを受けました。寛政六年（一七九四）の藩主宗睦の布達からは、木曽川中流域の拠点都市としての認識が窺われます。さらに幕府の海防政策により尾張藩でも軍制改革が行なわれ、寛政十一年には犬山城番組が残らず名古屋へ呼び戻されます。その屋敷跡地は成瀬氏家臣の屋敷や長屋となり、一部は町屋へ変ったとされます。犬山が成瀬氏城下町としての性格を改めて整えたといえます。

十八世紀後半に入ると尾張では中嶋・丹羽・春日井三郡の南部から海東郡にまたがる青物生産地帯、丹羽郡一帯の養蚕地帯、中嶋・丹羽・葉栗郡の綿作地帯と地域的分業が成立します。領主も農民の自由な商品取引を押さえ、問屋役を命じた商人を通じて介入しました。商人も運上金・冥加金を納めることで商業取引の独占をねらいました。犬山町方でも十九世紀に入るとこうした動きは活発になってきます。この時期に台頭する新興商人を代表するのが綿屋大嶋太兵衛家です。

領主も「蔵物」を介して商品経済へと直接参入します。蔵物とは年貢米や特産品など売却を目的に蔵屋敷へ廻送された諸品の総称です。成瀬家蔵物には糸・綿・紅花・荏油がありました。文化年間、成瀬家は蔵物の糸を京都屋敷へ廻送し販売していました。尾張藩も、大坂や江戸で蔵物を販売していましたが、主要な商品の一つは瀬戸物でした。文化年間に和泉屋小嶋弥五右衛門家が荵冬酒の江戸積み下しを出願します。相談を受けた名古屋町奉行所は「御用物」として扱えば堀川沿いの蔵屋敷や、堀川への入津の便宜が図られると示唆しています。成瀬家蔵屋敷は堀川沿いに二か所ありましたが、中橋蔵屋敷は商人に貸し出されています。蔵物を納める蔵から商人に貸し出され、地代収入を得る場へと蔵屋敷の機能は変化しています。成瀬家の蔵物産物会所は、天保五年（一八四八）には信州松代の真田伊豆守の城下へと進出しています。進出の経緯や背景は全く分っていませんが、資料からは地元の有力商人を責任者に任命して営業に当たったことが分っています。

成瀬氏の給知村に愛知郡下之一色村があります。専業の漁師が多く暮らす村で、伊勢湾沿岸での貝漁を独占していました。水揚げされた貝は剥き身にして熱田魚市場などへ出荷されましたが、貝殻は晒貝として利用されました。下之一色村の晒貝は、泉州堺の商人貝屋小西家により堺へと持ち込まれ和菓子の器や装粧品に利用されました。堺にも成瀬家の屋敷がありました。資料的確証はありませんが、成瀬家の存在が見え隠れします。堺屋敷も鉄砲鍛冶年寄役芝辻利右衛門に委ねられ、借家経営が行なわれていました。

近世後期、領主の財政事情は一様に厳しい状況となります。成瀬家の金主は大坂の鴻池家、名古屋の信濃屋関戸家です。ともに著名な豪商です。それぞれに十五人扶持が給され、武士の処遇が与えられています。金主への丁寧な対応の証しです。財政困窮の打開策に献金や調達金があります。成瀬家では献金や調達金の外に、天保四年から「犬山御城金」名目で、地域金融を行なっていました。尾西・尾北の豪農から出資を募り、成瀬家名義で貸付けるもので、配当は年利九分から一割、返済期間は五年でした。尾張藩の調達金が年利八分、返済期間十年でしたから、きわめて有利な投資でした。成瀬家名義での貸付けなので、返済の遅れは成瀬家御城金役所が督促しました。この点でも出資者には安全な投資でした。成瀬家は拝領鷹場内の村々からの出資金を基にした鷹場金の運用も行なっています。これも地域金融です。いずれも利ざやを稼ぐのが目的でした。犬山御城金を巡っては尾張藩との間で軋轢を生んでいます。藩は成瀬氏給知以外の村への貸付けを問題視し規制しました。しかし、天保六年には規制を撤回しています。天保七年からの凶作により返済が滞りはじめると、成瀬家は藩の支援を求めます。藩は借り手に対して成瀬家への返済を確約する請書を村単位でまとめ、庄屋の奥印を付して所付代官に提出するよう命じています。藩がその権力を用いて給人主催の金融を援助することが承認されたわけです。ここでも成瀬家の政治力が発揮されています。天保期の尾張藩は幕府からの押しつけ養子問題で揺れています。当時の成瀬家当主（正寿まさなが・正住まさずみ）は養子相続を強く推進していました。そのため激しい非難を受け、正住は天保十一年に犬山に退きます。藩政への復帰は十四年でした。御城金融資を巡る藩との軋轢の背景には、こうした政治的緊張もありました。

犬山の位置を考える場合、成瀬家の存在は避けて通れないものです。しかし、成瀬家の資料からその全てを解明することは困難です。犬山町方と商家に関しては調査が尽くされたとは言い難いのが現状です。他地域の資料から手がかりを見つけ出すことも必要です。入鹿池や入鹿井筋、木津井筋といった尾張平野の北部一体の農業を支えた水資源について検討することも重要です。文化面は言うまでもありません。

犬山学研究センターが、新たな視点で地域と向き合い、過去と現在、未来を結ぶ研究の核となることを期待します。

プレゼン② 犬山研究の魅力：自然

足立守・名古屋大学PhD登龍門推進室 特任教授、名古屋大学 名誉教授

足立 守

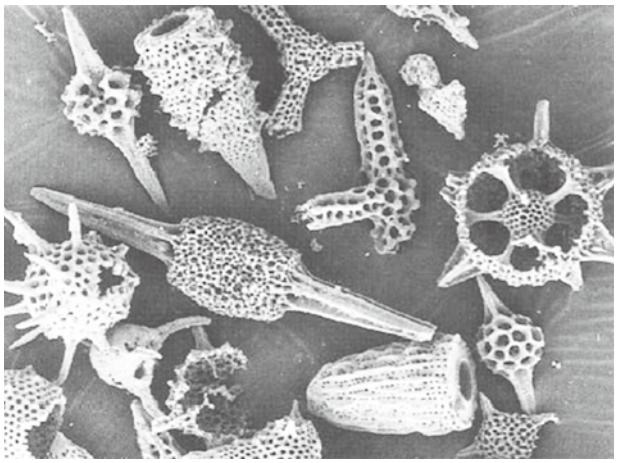
1969年名古屋大学理学部卒業、1975年名古屋大学大学院理学部研究科博士課程修了。
日本学術振興奨励研究員、名城大学理工学部助手、名古屋大学理学部助手、助教授を経て、1993年名古屋大学理学部教授、2000年4月名古屋大学博物館教授・館長、現在に至る。1974年日本地質学会研究奨励賞を受賞。

今から約280年前の1735年に、スウェーデンの博物学者・生物学者リンネは、地球の自然物は動物・植物・鉱物の3つという考えを提唱した。リンネのこの考えは今日でも正しく、地球では動物と植物と鉱物（鉱物の集合体が岩石で、岩石の風化したものが土壌）が、水を介してお互いに密接に関係して生態系を作っている。鉱物と深い関係がある植物としてヘビノネゴザというシダがある。ヘビノネゴザは日本産の約800種類のシダ植物の中でカドミウムや鉛などの重金属を最もよく吸収する性質があり、鉱脈探しを職業とした“山師”の中には、古くから、このヘビノネゴザを使って金・銀・銅などの鉱脈を見つけてきた者もいた。植物はその場所の土壌と相性がよければ繁茂するので、勘のいい“山師”は自然をよく見て考え、『自然に学ぶ』というスタンスで仕事をしてきたと思われる。

犬山は木曽川が山地から平地に出る場所に位置し、中部日本南部の自然をよく残している。犬山の自然を語る上で重要なものは、動物として、化石ではあるが、放散虫とアンモナイト、植物としてヒトツバタゴ、鉱物としてチャートが挙げられる。よく知られているように、ヒトツバタゴの自生地は岐阜県東濃地方、愛知県入鹿池地域、長崎県対馬、朝鮮半島南部、台湾である。これらの地域には、花崗岩や花崗岩起源の砂岩が分布していることが多いので、入鹿池南のヒトツバタゴの自生地にも花崗岩が分布している可能性がある。

愛知県北部から岐阜県南部には、層状チャートというシリカ（SiO_2）が90～100%の堆積岩が広域的に分布している。チャートは赤（赤褐色）、緑、青、黒、白など様々な色をしているが、どれも硬く風化に強いので、ゴツゴツとした崖や山地を形成する。戦国時代に築かれた犬山城・岐阜城・小牧山城はすべてチャートでできた小高い山の上にあり、石垣にもチャートが使われている。硬いチャートは石器の主要な原料にもなっていて、入鹿池北の旧石器遺跡からは旧石器時代末の石器が発見されている。石（鉱物）はヒトとも密接に関係している。

犬山のチャートは中生代三畳紀の放散虫化石を含むものが多い。放散虫は海棲の原生動物で、サイズは約0.1～0.8mmと小さく、殻や骨格がカルシウムとリンではなくシリカでできていることが大きな特徴で、今から約5億年前の古生代カンブリア紀に出現し現在の海にも生息している。中生代ジュラ紀の放散虫化石は、犬山の珪質頁岩に普遍的に含まれている。珪質頁岩中にまれに存在するマンガンノジュールと呼ばれる石には、保存状態が驚くほど良好なジュラ紀中期の放散虫化石（写真）が多数存在し、世界的に有名である。鵜沼の名前を冠したウヌマエキナタス（*Unuma echinatus*）という放散虫がその代表で、ジュラ紀の示準化石になっている。



こうした地質学的背景から、毎年、国内外の多くの地質学者、古生物学者、大学生、自然愛好家などが木曽川河床に露出する中生代の放散虫化石を含む地層の見学に訪れる。2017年10月に新潟で開催された第15回国際放散虫研究集会（Inter Rod）では、フィールドエクスカーションとして犬山・鵜沼の木曽川沿いの地層見学会が行われ、世界各国の放散虫研究者が参加した。犬山・鵜沼が今も世界の放散虫研究者にとって重要な地域であることを物語っている。

犬山には保存状態の良好な化石を含む地層・岩石、貴重な動植物が数多く存在するので、こうした自然遺産を次世代教育、地域研究、観光等に最大限活かすようなアイデアが必要である。

プレゼン③　犬山研究の魅力：地域政策

佐藤正之・名古屋経済大学准教授・地域連携副センター長

佐藤 正之

1995年 愛知大学文学部史学科地理学専攻卒業、1999年愛知大学大学院地域社会システム専攻修士課程修了、豊橋技術科学大学地域協働まちづくりリサーチセンター研究員、愛知大学三遠南信地域連携研究センター研究助教などを経て、2016年4月名古屋経済大学准教授、現在に至る。

今回は犬山研究の魅力について、大枠のみですがお話しします。まず、地域政策についてです。犬山研究を「地域」と「政策」に分けて考えてみます。地域は犬山で説明できますが、政策科学の範疇は広く学問領域を跨ぐことから、地域政策を一口で定義することは困難です。そこで、犬山のようなある一定の範疇において、利害関係者の合意形成を得ながら地域の課題解決や経営方針・計画の策定・実施する過程を研究し、同時にその地域の発展を考える学問分野と仮定しておきます。この分野は現在進行形で動き続けると同時に、多様な領域からの示唆を得られる分野でもあります。

例えば近年の地域課題となっている獣害について、全国でイノシシが約88万頭、シカ約261万頭が生息していると推定（2011年時点）されており、この数は江戸時代以降で最も多いのではともといわれています。しかし野生鳥獣の移動や増加による生息域の変化や被害状況は、部分的にしか把握できていないのが現状です。それでも鳥獣保護法と鳥獣被害特別防止措置法に拠り、都道府県による保護管理計画と市町村による被害防止計画がそれぞれ策定され、概ね全国の8割ほどの市町村で対策が実施されています。

ただしこの対策は、周辺地域および関係団体との情報共有・調整あるいは整合性など、地域の条件によって効果が異なります。また市町村の計画と県の計画の整合性、さらに環境省の保護管理と農水省の被害防止との調整まで、地域の計画の妥当性と効果検証には複数のハードルがあります。そのため一方では、省庁横断あるいは都府県を跨ぐような広域的な事業計画や指針も存在し、その効果や課題も認識されつつあります。この点では、犬山および周辺地域での取り組みは、地域政策研究の視点から非常に魅力があります。

この魅力は愛知・岐阜県境に接していること、また木曽川・および中山道という人と物の流れの蓄積があるといった犬山の地域性とも関係します。広域の計画・政策では名古屋都市圏の一部として位置づけられる犬山および木曽川中下流域ですが、南北の水環境・東西の歴史環境の結節点であったものが、物流や水利用、土地利用の変化によって中心性が低下し、境界・周辺へと変化してきた地域と考えられます。それでも、例えばリニア新幹線の計画では名古屋40分交通圏に含まれる犬山地域を俯瞰すると、近年の人の動きの増加や、地域を環状に取り巻く高速道路網の存在など、現在でも地域のポテンシャルは非常に高いといえるでしょう。このリニアに関わる犬山地域のビジョンの整合性や県境を跨ぐ圏域での連携の可能性は、地域政策研究のテーマとなり得ます。

地域政策研究においては、歴史的にもつながりの深かった枠組みや地域構造を礎に、近隣市町村の人々が交流・連携することで再発展している事例もあり、地域政策を担う人材も興味深いテーマです。この人材については、犬山学研究センターの取り組みで最も重要な部分です。現在、大学では表のような多くの地域連携活動に取り組んでいますが、こうした取り組みに関わる人材や組織の発掘と連携の蓄積は、大学と地域との教育・研究へつながるポテンシャルを有しており、今後の展開が期待できます。

表　地域連携の活動例（地域×学生）

No.	実例	地域	活動団体種別	活動把握・報告・検証
1	小牧産業フェスタ	小牧市	産官学連携	参加学生の意見反映
2	楽田夏祭り	犬山市	地域コミ	サークル参加、学生研究室
3	市民会議メンバー	犬山市	行政	犬山市→地域連携センター
4	学習チューター	小牧市	行政	学生→地域連携センター相談
5	フレッシュフレンド	小牧市	行政	学生→地域連携センター相談
6	犬山選管事務	犬山市	行政	事前対応可能、不定期
7	犬山観光学生大使事業	犬山市	観光協会	推薦型、要外部要望対応、定型化
8	扶桑町学習支援ボランティア	扶桑町	NPO・行政	学生→地域連携センター相談
9	駒来塾	小牧市	行政	学生→地域連携センター相談
10	きっず愛らんどIN大口	大口町	NPO×人間生活科学部	授業の一環
11	大口町人形劇	大口町	行政	サークル活動
12	タリーズコーヒー読み聞かせ	小牧市	企業×人間生活科学部	授業の一環
13	本庄台てらこや学習支援	小牧市	地域コミ	学生→地域連携センター相談
14	犬山シェイクハンズ事業	犬山市	NPO×国際交流室	国際交流室→地域連携センター
15	犬山城下町キッズ愛ランド	犬山市	NPO	NPO→地域連携センター
16	石上げピラフ企画	犬山市	商工会議所×人間生活科学部	
17	音楽祭典ボランティア	犬山市	企業	参加学生の意見反映
18	楽田コミ事業	犬山市	地域コミ×学生個人	イベント補助
19	楽田歴史文化を守る会	犬山市	市民活動団体×学生個人	イベント補助
20	いぬこれ	犬山市	市民活動団体×学生個人	イベント企画・手伝い

注:名古屋経済大学地域連携センター把握分のみ（H28,29年）

以上のような犬山学研究を進める大きなポテンシャルがこの地域にはあり、大学と地域の関係構築も始まっていることから、表の分類例のような地域の多様な人材が、連携の場を経て活動を展開するプロセスなど、地域政策研究のフィールドとしても非常に興味深い地域であるといえるでしょう。

表　地域政策の多様な人材と性質

性質／人材	住民	行政	産業界・NPO	学生	大学
学習	地域理解・郷土学習（生涯学習等）	地域に関する公開講座開催等	文化事業・学校教育への参画	大学での科目受講	教員の地域に関する科目・公開講座等
研究	郷土史家等による研究	史誌作成、郷土研究・資料館等の研究	各分野での実施事業の蓄積	学生による研究	教員による研究
地域づくり	講座・イベント等開催	地域・文化振興の施策実施	地域に関わる活動主体・協力（協賛等）	学生によるまちづくりやボランティア等の活動	専門分野の研究成果の提供

パネルディスカッション

犬山学研究の魅力についてお話いただいた3人のパネラーに再びご登壇いただき、犬山学研究センターの中村センター長の司会により、改めて犬山学研究センターがどのような役割を果たしていくべきか、その使命とは何か、について意見交換をいたしました。

犬山学研究センターの役割について

松田　特に犬山の町衆を支えた文化について研究すべきだと思います。祭りの他に、どういった学問を学び、どういった書籍を読んできたのか、あるいは習い事など、ここが見えてくると町衆文化がわかってくる。もう一つは、過去のものとして懐かしむだけではなく、今にどうやって繋げていくのかが重要。

また犬山学は学際的という表現をされておりますが、むしろ総合的の方が適切ではないかと思います。あらゆる学問と方法を用いて総合化できるか、について重きを置かれる必要があるのかと思います。

足立　地球の自然（動物・植物・鉱物）は全国どこにでも存在しますが、犬山にはその中でも特徴的で良い地層・鉱物がある。それを地域の宝として使っていくべきだと思います。具体的にどう使うのかというと、私は次世代教育に使うのが一番いいと思います。

佐藤　地域政策について先程いくつかお話いたしましたが、その中で木曽川についてですが、犬山は木曽川を中心として、境になる場所でもありますが、両地域を繋ぐ場所でもあります。広い意味で犬山学を捉えていくべきだろうと思います。このエリアには多様な主体があること、木曽川を境に多様な主体がクロスオーバーする可能性を考えていくべきではないかと思います。

犬山学をどう実践していくのか

松田　やっぱり継続は力なりかと思います。こういった研究を5年10年と続けていくことが重要だと思います。その意味では大学は永続性がありますから、大学が軸になって作っていく意味、その軸がブレないように進めていくべきではないかと思います。

足立　私が2000年に名古屋大学に大学博物館を作った時に考えたのですが、地域連携と次世代教育はどの大学でも重要なミッションです。犬山学研究センターもこの地域を活かした次世代教育をしてくべきだと思います。それにはアウトドアで、臨機応変に自然から学んでいく体験型の教育が大切だと思います。

佐藤　本学では地域連携センターとして、地域に関わる活動をたくさんしておりますが、定型のものというのは一つも無く、それぞれの活動で対応が変わってくるし、一つ一つ丁寧に対応していかなければならないので時間がかかる。こういった事も確実にこなしていかないと継続性、信頼性につながらないので、これは犬山学研究センターについても同じことが言えると思います。

中村　今、先生方よりご意見を頂戴して、いくつかの事が見えてきました。まずは継続は力なり、と言う事ですが、常に走りながら臨機応変に継続していく。その中で中心軸がブレないようにすることが非常に重要であると感じました。また、研究だけでなく教育についての役割も重要であると感じました。さらには、大学が中核を担っていく事によって継続性のメリットがあるが、対外的に信頼性を得る為には継続的に地道な活動が必要であるとのご意見もいただきました。

閉会にあたって

犬山市長
山田 拓郎

犬山の魅力を犬山学として地元の大学が研究することは意義深く、犬山にぴったりの展開です。

今は世界規模で物事を考えていく時代ですが、一方では地域性にも目を向け、グローバルとローカルを掛け合わせたグローカルな意識を持つことが重要で、まさに犬山学の展開はこれに合致しています。

犬山には、まだ光が当たっていないものも含めて素材がたくさんあり、これをしっかりブラッシュアップしてほしい。地元の市長としても名古屋経済大学の卒業生としても、大いに期待しています。犬山市もしっかりサポートして取り組んでいくので、本日おいでの皆様方にも応援いただくよう、お願いいたします。

閉会挨拶

名古屋経済大学学長
佐分 晴夫

私はこの犬山学という研究を通じて地域研究のモデルを作り上げたい、という大きな希望を持っています。現在の学問は非常に細分化しており、これが問題となっております。単にそれぞれの研究をしていても、それがネットワークとして繋がっていなければ犬山学とは呼べないと思います。これを地域研究という切り口において、総合的に研究をしていきます。もちろんこれは私共の名古屋経済大学の研究者だけで出来る事ではございません。この地域の研究機関,研究者の皆様や、高等学校,日本語学校の先生方とも協力しながら進めて参りたいと思います。

設立記念レセプション

シンポジウム終了後、博物館明治村内の帝国ホテルに場所を移し、設立記念レセプションパーティーを開催いたしました。シンポジウムにご参加いただいたご来賓の皆様をはじめ、多くの方をお迎えし、犬山学研究センター設立に対する期待感と共に、終始和やかな雰囲気で行われました。また大変多忙な時期にも関わらず、大村秀章愛知県知事にもご参加いただきました。

左から　末岡仁市邨学園理事長、原欣伸愛知県議会議員、山田拓郎犬山市長、大村秀章愛知県知事、成瀬淳子犬山城白帝文庫理事長、佐分晴夫名古屋経済大学学長、日比野良太郎犬山商工会議所会頭

大村知事はご挨拶の中で、愛知県が昨年度から取り組んでいる、「あいち学生観光アワード」で、優秀賞となった学生の提案を大学が後押しをして研究センターに結びつけたのは素晴らしい事だと思います。歴史・文化も詰まっている犬山を、さらに多くの人に知っていただき盛り上がって行く事を期待する。との激励の言葉を頂戴しました。

TOPICS

犬山学研究センターの活動報告と今後の活動予定

【活動報告】

●2017年10月21日（土）
犬山学研究センター設立記念シンポジウム開催
（博物館明治村 聖ザビエル天主堂にて）

●2018年1月22日（月）
第5回犬山地層勉強会「ジオ鉄®入門－大地の物語を楽しむ鉄道旅への誘い－」開催
（講師：藤田 勝代・深田地質研究所・主任研究員、深田研ジオ鉄普及委員会・委員兼幹事、犬山市役所205会議室にて）

●2018年2月6日（火）
第1回犬山学サロン「犬山に伝えられた3つの物語と2つの言葉」開催
（講師：赤塚次郎・NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク理事長、本学5号館5B2教室にて）

●2018年2月20日（火）
2017年度 名古屋経済大学犬山学研究センター 評価委員会
（犬山市役所301会議室にて）

【今後の活動予定】

●2018年4月～
犬山学サロン（犬山に関わる第一線の研究者・実務家をお招きして、犬山の魅力について議論するサロンを学内にて開催し、市民・学生に公開）を定期的に開催予定

●2018年度
名古屋経済大学2018年度体験型プロジェクト「犬山学講座シリーズ」を開講予定

●2018年夏期
広報誌『犬山学』第3号刊行予定

広報誌「犬山学」　第2号
発行日：2018年2月23日
発　行：名古屋経済大学 犬山学研究センター
〒484-8504　愛知県犬山市内久保61-1
TEL：0568-68-3282　FAX：0568-67-0724
MAIL：inuyamagaku-c@nagoya-ku.ac.jp

筆文字：犬山城白帝文庫 理事長 成瀬淳子
表紙写真（提供）：博物館明治村